

迷宮から司祭館へ、モーリアックの 『黒い天使たち』

内 山 憲 一

Du labyrinthe au presbytère,
Les Anges noirs de Mauriac

UCHIYAMA Kenichi

『蝮のからみあい』（1932年）において、怒りと吝嗇とに蝕まれた人生を送ってきたある一人の男を、その死を前にして積年の妄執から解放させることに成功したフランソワ・モーリアックにとって気がかりだったのは、27年に上梓した代表作の主人公、テレーズ・デスケールであった。活字に定着し公表した後は一人歩きさせている幾多の作中人物たちの傍らに、創造者たる小説家自身、その後の歩みをひどく気にかけている作中人物がいるものである。忘却の縁から生き延びて、「まるで最後の言葉を言っていないかのように、私たちのまわりをうろついている人物がいる」とモーリアックは記している¹⁾。このような生き残り現象は、文学史の中に燦然と輝いている『ゴリオ爺さん』や『ボヴァリー夫人』のそれとは比すべくもないと作家は続けているが、20世紀も終わろうとしている今、文学愛好家の目にとっては、テレーズはすでに古典的風格を備えた一典型に近い存在として映っているのではないだろうか。

作者に反抗する作中人物テレーズを、モーリアックは『夜の終わり』（35年）において意に添うところまで導くことはできなかった。それを悔やむ気持ちが『黒い天使たち』（36年）の出发点にはある。作家はそのために、ジョルジュ・ベルナノスが『悪魔の陽の下に』（26年）で描いたドニサン神父のような存在に発展しうる人物、アラン・フォルカを過去の自作より取り上げている。『失われしもの』（30年）においてアランは主役ではないが、モーリアックにおいては珍しく舞台となっているパリの虚飾と悪徳に満ちた社会において、純粋さを体現する若者として登場している。姉トータとの姉弟愛が度を越えた危険な情愛であることに気づき苦悩するアランが進んでいく道は、作品の最後で示されていた。

これからはもう、彼はあまり速く走ることはないだろう。それはまるで、トータがその首に腕を巻きつけているかのようであった。それにトータばかりではないのだ。他の多くの者たちが彼の衣服にしがみつくとことだろう。ぶどうの房のように鈴なりになった人たちを

彼はすでに引きずっているのだった²⁾。

12年間も出血を患っていた女がイエスの服の房に触れた途端に癒される新約聖書中のエピソード³⁾を想起させるこの文章は、アランが聖職の道に進むことを明示している。『黒い天使たち』において、26歳の若き神父として再登場するアラン・フォルカの僧衣の房に触れるのは、悪事に満ちた半生を送ってきた男、物語のクライマックスにおいては殺人にまで手を染めることになる50歳の男、ガブリエル・グラデルである。「私の二人の天使、白い天使と黒い天使」——ファイヤール版作品全集の序文において、モーリアックはこのように物語の二人の主人公を形容している。

1. タイトルをめぐる問題

それでは『黒い天使たち』という複数形をどう理解したらよいのだろうか。「黒い天使」と言うと、通常は「失墜した天使、恩寵を失った天使」と解釈し、ガブリエル・グラデルを指すことに落ち着く。なぜならば Gabriel はとりもなおさず天使の名前、イエスの誕生をマリアに告げる「受胎告知」の大天使の名前であるからである。人の心を読むなどの神秘的な力を付与されたガブリエルは確かに、神の呼びかけに答えたアランに釣り合う作中人物として描かれている。また同じ Gabriel が旧約聖書中『ダニエル書』においては、預言者ダニエルに彼が見たヴィジョンの意味を説明する役割を果たしていること⁴⁾を考えると、アランに「悪の神秘」を開示することにより、逆説的に聖職者としてのアランの資質を開拓する役割を果たしていると読むことも可能だろうか。作品のプロローグをなす司祭アランに対する告白の手紙の中にいて、ガブリエルは次のように述べている。

これからする話は、あなたの仕える不可視の世界に対する信仰の念を、むしろ強める働きをするはずです。それというのも、超自然的なものの中に、下方から入り込むこともできるのでしょうから (217)⁵⁾。

ガブリエルという名前から「受胎告知」の大天使を連想することは西洋文化圏の人にとっては自然なことであろうが、批評家も指摘しているように、その名前にもう一つ象徴的な意味を割り当てることができる。ガブリエル・グラデルの Gradère は *dégrader* すなわち「墮落させる」という動詞と音韻的に密接な関係を持っているのである⁶⁾。一時期、小神学校にも在籍し、まわりの者からは純粹この上ない子供とみなされ、「純真さのマスク」(228)をかぶり、事実そのように振る舞いつつも、魅惑し「墮落させる」者としての資質を常に意識していた子供、そのようにガブリエルは自らを描写している。「子供のころから、私の内部には冷静な好奇心のようなものがあって、自分の魅力が及ぼす作用を注意深く見守っていました」(217)。けれどもそれだけではない。ガブリエルには二面性があった。毎朝ミサの答唱をし、公教要理

においては模範生として表彰される子供は実際に敬虔だったのである。モーリアックは彼に次のように言わせている。

まったくのお芝居というわけでもなかったのです。もともと宗教上の儀式には感じ易い性質でした。あのような照明や歌声や香りは、私には贅沢でした。知らず知らずのうちに、それに飢えていたのですが、あの未知なる贅沢のうち私が嗅ぐことのできたのはそれだけでした (218)。

超自然的なるものを感知する器において、善悪はまだ未分化の状態だったのである。モーリアックは続けてガブリエルの口を借り、「感性的な信心」に対しては疑義を呈している。ある人たちにおいては、それは「最悪の兆し」だからである (219)。プレイヤード版小説・戯曲全集編者が注で指摘しているが、モーリアック自身、自らの文学的出発点にあったのは、このような安易な感受性であったことを認め、そこに 1920 年代後半に襲った信仰上の重大な危機の一因を見ている。

まったく対照的な運命を生きているように見えるガブリエルとアランの二つの人生は、実は同じ善悪未分化の器から流れ出ているのではないだろうか。だからこそ、相手の運命が自分のものだったかもしれないと感じるほどに、二人は互いのうちに自分の分身を見出していくことになるのである。外見上いかに墮落しているように見える人の中にも、何かしら聖なるものが潜んでいることをモーリアックは繰り返し述べている。聖人のようになる可能性と罪を重ねて墮落していく可能性とが、人間の中には共存しうる——聖性と罪との混じりあいがある人間の悲惨さの中に内包されていること、このような考えは決して独創的なものではない。ジャン・アムルーシュとの自作をめぐる対話集において、モーリアックは例えば文学史における「抑圧された聖性」の例としてランボーとバイロンの名を挙げているが⁷⁾、むしろ陳腐な指摘と言ってよいだろう。作家の指摘を言い換えれば、人間の「惨めさはその偉大さから結論づけられ、偉大さはその惨めさから結論づけられる」となり、実にパスカル的なレトリックの内に位置づけられることになる⁸⁾。けれどもパスカルも説いているように、人間のこの二面性の一方のみをクローズアップするのは危険である。モーリアックが「悪をなすべく運命づけられたかのように見える者こそ、たぶん他のすべての人たちに先んじて選ばれていたものであり (・・・) おそらくは、聖人になりえた者だけが墮落するのである」(361) と言うとき、秤は負の方に傾き、カトリック界保守派の目にとって作家は攻撃の対象となるのである。

ともあれ、アラン・フォルカもまた、姉から離れ神父となる道を選ばなければ、危険な情熱の虜となっていたかもしれない。グラッセ社のカイエ・ルージュ叢書の『黒い天使たち』序文執筆者は、もう一人の「黒い天使」をフォルカ神父としているが、他の主要な作中人物たちもまた、それぞれの黒い欲望に捕らえられている。したがって、小説に再登場し、アランの神父としての評判を傷つける存在となっている姉トータを、特に「黒い天使」に祭り上げる必要は

ないようである。ガブリエルの息子アンドレスの愛人となって、弟とガブリエルとを表面的に結びつけている——もちろん二人の主役の結びつきはそれ以上のものである——トータの役割は看過しえないが、その出番は限られ、ガブリエルに釣り合う存在ではない。

けれども、実はこのタイトルの単数から複数への移行には現実的な理由があったことがわかっている。1935年6月28日から9月20日にかけて『グランゴワール』誌に掲載された小説のタイトルは単数の『黒い天使』であった。それがグラッセ社より単行本化されるにあたって、すでに同タイトルを「確保」していた者からクレームをつけられ、訴訟沙汰にまで発展しそうであった由、作家自身が前述の対話で述べている⁹⁾。もっとも、別のタイトルへの変更ではなく、複数形への修正でよしとした理由は、やはり人間という存在の「白」の中に「黒」の要素が胚胎していて、両要素は相互浸透しているとモーリアックが考えていたからではないだろうか。

2. 功德の転換

『黒い天使たち』出版時、作品に対する批評は一般に芳しくなかった。小説後半部においてガブリエルが犯すことになる殺人と、その余波に巻き込まれていくまわりの者たちの反応をめぐって、物語の展開がまるで安易な「推理小説」のようであるとの批評まであり、作家自身それに答えるように、後年ファイヤール版作品全集に寄せた序文において、「もしかしたら私は(…)シムノンが有名にした道で成功したかもしれない」と述べている¹⁰⁾。けれども、例えば同時代の小説家マルセル・アルランが、『黒い天使たち』はモーリアックが書いた作品の中で「最も驚くべき、奇妙なもののうちの一つ」であると言うとき¹¹⁾、それは明らかに筋の展開の仕方ではなく、作品の主題に関してのことである。

同序文においてモーリアックは、アラン・フォルカもの(『失われしもの』『黒い天使たち』)は「召命」(vocation)の物語、「功德の転換」(réversibilité des mérites)の物語であると述べている。「善行の転換」とも訳される二番目のカトリック神学用語は何を意味するのか。単なる義務の範囲を越え愛徳心から出た行為「善行」は、神の目においては功績「功德」ともなるのであるが、これがméritesであり、奇妙なことに辞書の定義からして、ある人から他の人に移行・転換が可能な(réversible)ものであるとされている。また神学用語としてréversibilitéだけでも、無垢な人のmérites、あるいはその苦しみが、罪人の罪の贖いに資することを指す。この言葉がキーワードとなっている文学的テキストの中で最も有名なものが、タイトルがRéversibilitéそのものであるボードレールの詩であろう。

幸福と、喜びと、光とに満ちた天使よ、
死にかけたダヴィデも健康を求めたことだろう、
魔法にかかったあなたの身体から放たれる靈気に。
けれども、天使よ、あなたの祈りだけを私は願おう、

幸福と、喜びと、光とに満ちた天使よ！

『悪の華』第2版44番のこの詩の最終節において、旧約聖書の『列王記』上第1章冒頭に読まれるエピソード——老年で弱ったダヴィデ王が活力を回復するようにと、家臣たちが若く美しい娘を、その臥床に連れて来た——を踏まえ、肉体的・精神的な衰弱に苦しむボードレールは、問いかけの相手である快活なサバティエ夫人に、自分のために祈ってくれることだけを求めている。

かなり虫のいい話ではある。この「功德の転換」という概念は、実際に熱心なカトリック信者でなければ、なかなか実感しにくいものではないだろうか。前記の対話集においても、アムルッシュは作家に疑問をぶつけ、挑発さえしているように見える——ガブリエル・グラデールは多くの犯罪に手を染めた犯罪の「曲芸師」であるが、アラン・フォルカという「網」があるからこそ曲芸ができるのではないか。アランがいるからこそ、ガブリエルは最後にはうまく切り抜けることができると思っているのではないか。実際に、殺人まで犯すことになった男のために、神父は苦しみ祈り、その傍らで男は平和な心持ちで死に向かって行くのであるが、これはありえないことではないのか。

対してモーリアックは、それは確かに根拠のない、いわゆる「無償の」ことであると答えざるを得ない。「贖い」(rachat)や「功德の転換」に対して彼が抱いている概念に、現実の何かが対応しているのかと問われると、答えはおぼつかなくなってしまう。けれども実生活においては「私はいつも祈りの効果、犠牲(sacrifice)となることの効果を感じてきたのです」と述べ、『黒い天使たち』は狭い意味での現実観察からなる作品とは言えないだろうが、自分の信仰観を表している作品であると作家は答えている¹²⁾。その考えを裏づけるかのように、ガブリエルのアランに対する告白の中には、「贖い」と「犠牲」とを並べて使っている興味深い文章が見られる。

認めていただけますか。このような苦しみによる贖い、このように命を犠牲にするという考えは、奇妙な信仰ですね(…)でもおそらくは、真実とは奇妙なものなのでしょうね(240)。

「苦しみと犠牲とによる贖い」という考えがモーリアックの信仰の核心にあったことは、他の作品にもうかがうことができる。例えば、初期作品の『肉と血』(20年)における二人の青年クロードとエドワールとの会話を聞いてみよう。二人の魂はあまりにもかけ離れているので君は僕のためには何もできない、こう言うエドワールに対して、元神学校生のクロードは「いいえ、あなたのために苦しむことはできます」と本能的に答えてしまう。すると「功德の転換」という教義を思い浮かべたエドワールが言う。

「君にはね、贖罪のやぎ (bouc émissaire) にはなってもらいたくないんだ。僕の罪なんて担ってもらいたくないよ」。

その時思わず口の端に乗った言葉に、クロードはわれながら驚いてしまった。「その罪なら僕が引き受けましょう。もしよろしかったら」。彼には、もう一人の人が自分のかわりに話しているように思えた¹³⁾。

クロードは以後、エドワールの運命に彼自身の運命が密接に結びついていくことを確信していく。『蝮のからみあい』においては、主人公ルイのまだ幼い娘マリが腸チフスによる瀕死の苦しみの中で、「パパのために！パパのために！」とうわ言を繰り返し、「いやよ、わたしもっと苦しめるわ」と叫ぶことになるが、晩年のルイはその死が自分のための贖いであったと確信するようになるだろう¹⁴⁾。このような「贖い」と「犠牲」のテーマが最もあからさまに表れている——タイトルそのものにすでに「贖い主」が内包されている——のは『子羊』(54年)である。これらの小説においては、主人公あるいは重要な作中人物の死による「功德」が、その運命に結びついた人物のうえに「転換」することになる。

3. ガブリエル、矛盾する魂

もっとも、ガブリエルのような人物が恩寵を受けることは、やはり一般的読者の目には不自然なことで映っておかしうはない。出版時、批評家たちの反応は概ねそのようなものであった。モーリアック自身、前述の対話において恩寵は無償であると言っている。けれども、それを受ける側に「転換」を引き寄せる素地がまったくないと言えるだろうか。小説家として、そのような素地を描きこんではいないだろうか。例えば『蝮のからみあい』は、家庭内で孤立し身内の「敵」となっていたルイが妻に宛てた告白の中で自己弁明するノートの形を取るが、自己の内面を仮借なく掘り下げていく過程で実は書き手も気づかぬままに、妻への愛が扉となり、執筆行為はその背後に隠れていた大いなる存在への必死の歩み寄りとなっていたことがわかる。受け手側の真摯な態度がなければ、妻の苦しみ、マリの苦しみも、その上に転換することはなかったのではないだろうか。

『黒い天使たち』の場合はどうか。エピローグで語られるガブリエルの回心はルイのそれに比べると、やはり唐突に見えることは否めない。第一、ガブリエルはなぜ己の汚濁の人生を語ることにしたのだろうか。一読して、この点に関してはガブリエルの文章は、はっきりと語ってはいないように見える。息子のアンドレスの結婚・相続問題に関して、争いの完全な外側にいる聖職者に相談するために、問題が発生した経緯を自分の生い立ちから始めて語った——告白の最後の部分はこのような印象を与える。しかし、中断された告白の最後の呼びかけはあまりにも悲痛に響いている。「神父さん、あなただけです、あなただけが…」(243)。この叫びの裏側から聞こえてくるのは、プレイヤー版小説・戯曲全集の注によるとモーリアック自身が信仰上の指導者であったアルテルマン神父から直接聞いたとされる言葉、そしてガブリエル

が二度繰り返している言葉である——「あの方〔この世の帝王＝サタン〕に引き渡されてしまった魂がある」(232, 233)。この「悪」の存在という問題について、晩年のモーリアックは『私の信条』(62年)の中で、悪魔とは私たちの中に潜んでいる悪をシンボル化したものであると思いたいのだが、そう理性的に割り切れない理由を語っている。

これまで生きてきた間に、「悪」とは現実、実体的に、誰か人の形を取っているという印象、確かに証拠というわけではないけれども、そういう印象を私は受けました。大変な罪人であると分かっている人たちについては、悪に憑かれているかもしれないと思ったことはありませんでした。けれども反対に、あまり墮落していない暮らしをしているように見えた他の人たちの中にこそ、何かが存在しているように感じていたのです。十分に長い時間をかけて観察することのできた生涯の中には、何か奇妙で怪しげな光に浸されていたように思えたものもありました¹⁵⁾。

『悪魔の陽の下に』におけるベルナノスのように「悪魔」を直接登場させることはないが、『海への道』(39年)におけるランダンや『子羊』におけるジャン・ド・ミルベルのように、その行動の源泉に「悪」の存在が暗示されているような作中人物はモーリアックの小説にも登場している。『黒い天使たち』のガブリエルも、作家に取りついていてこのような強迫観念から生まれてきた。「純真さのマスク」をかぶっていた頃から、ガブリエルは何か目に見えない存在に付きまといわれていた。彼がその存在から超自然的な力を付与されていることを示す描写は作品中至るところに見られる。アランもまた、そのような力に敏感だったからこそ、ガブリエルの手記を読み「あの方に引き渡されてしまった魂がある」という文にたどり着いた時、「そんなことはない！」と大声で反応する、「そんなことはない、絶対に！」(314)。聖職者たるアランにとって、その存在を認めることは大きな誘惑だったのである。

作家として書いている小説に、このような「悪の神秘」(314)の問題が付きまといっていることに、モーリアックはキリスト者として危惧を抱いていた。これが1920年代終わりに経験した精神的危機の一因だったのではないだろうか。だからこそ作家はガブリエルをどうしても救いたかったのである。けれども、作品中彼にあからさまに救いを求めさせるならば、その不可思議な人物像が発散する魅惑は減ってしまう。したがって作家は、「この世の帝王」に引き渡されてしまったのではないかと悩み苦しむガブリエルの言動を曖昧に包み隠している。しかしその曖昧さも、告白という形式自体に内包される意味を変質させることはないだろう。

出世作の『癲者への接物』(22年)の初稿は『黒い天使たち』のプロローグと同様に、司祭に対する主人公ジャン・ペルエールの告白によって始まっていた。『テレーズ・デスケール』の原形として知られている掌編『良心、神への本能』は告解するテレーズの発話によって成り立っている。『蝮のからみあい』もまたルイの長い長い告白であった。モーリアックが好むこの「告白」は、受け手がそれを受け入れ、赦す力を持っていることを前提としている。『蝮の

からみあい』の主人公は、長い告発文を書くことによって妻に復讐していると思っていたが、妻が死ぬと実は彼女に理解され赦してもらいたかったのだと気づき、愕然とすることになる。「もう妻を見ることもないのだ。二人の間でもう釈明はないのだ。(…) あいつは私を知ることなく逝ってしまった」¹⁶⁾とルイは呟いている。ガブリエルもまたルイのように自らに対して盲目になっていたのだろうか。

神父としてのあなたは、私の関心を引きません (215)。

罪の赦しをお願いしようというのではなく、あなたにその力があるとも思いませんが、期待は一切抱かずに、心の奥底までさらけ出そうと思います (216-217)。

なるほど、ガブリエルは告白の冒頭でこのように繰り返してはいる。けれども、自然の中で幸福に過ごした若き日のある日中のことを語りながら、ふと「私の苦悩は奇跡的に中断していました。(…)」と言いますのも、この苛酷な苦痛、何ものかに絶えず掴まえているという意識は決して止むことがないのです」(232)と漏らしている。ガブリエルは苦しみ、助けを求めていたのである。彼が殺人を犯してしまった後で書かれた手記においては、あたかもアランが犯罪を阻止できたかのように、実際にこう記されている。

そちらへと差し出したこの手を、夕暮れのお陰であなたは見ないですみました。あなたは、この手が見えないふりをしたのです (349)。

4. 迷宮から司祭館へ

殺人を犯した後、犯罪の真相に近づくにつれ、その余波に巻き込まれることをおそれた身内に半ば追われるようにして、ガブリエルはアランのもとにやって来る。神父はその時初めて、「私は知らずにこの男を待っていたのだ」(355)と思い至るが、そのための伏線はもちろんガブリエルの告白だけではない。前述の通り、ガブリエルの息子アンドレスとアランの姉トータとの結びつきが、すでに二人の主人公の運命を引き寄せていた。その件について相談するために、神父はアンドレスが住み、その父が滞在している屋敷へと赴く。アンドレスとの会見中に、アランは何かの予感を感じている。「この部屋に自分がいるのは単なる偶然ではないと彼は感じていた」(305)。用件を終えて屋敷を出る時にアランは始めてガブリエルと言葉を交わし、その手記を受け取ることになる。しかしこの時点では、モーリアックはアランに特別な反応を取らせてはいない。「以前からなにかと悪評を聞いていたこの男の視線に貫かれるように神父は感じていた」(305)だけである。息子やアランがいる故郷ランド地方のリオジャに戻る前から、ガブリエルはすでにノートに告白をしたため、それを以前から見知っていた若い神父に渡すつもりではいたが、これが二人の実質的に最初の出会いとなっている。モーリアックはしかし、ガブリエルのリオジャ到着時に、アランとの霊的な絆を強めることになる象徴的な出

来事を設定していた。

夜行で駅についたガブリエルが、息子アンドレスや、その親代わりになって彼を育てた亡き妻の従妹マチルドらが住む屋敷へと向かう途中、アランの住む司祭館の敷居に奇妙な光景を見かける。切り取られたばかりのツゲと月桂樹の枝葉がじゅうたんのようには撒かれていたのである。結婚式の日に新婚夫婦の家の敷居をそのように覆う当地の風習を知っていたガブリエルは、すぐに敵意に満ちた悪ふざけを理解する。実はアランの姉のトータが夫と別れて弟のもとに身を寄せていたのだが、村人たちは彼女を青年神父の愛人だと思っていたのであった。悪い噂を知っていたガブリエルは、翌朝村人たちの具象化された敵意を見せつけられた時のアランの心痛を思い、急に自分には似合わないと思っていた善行をする気になる。枝葉を拾い集め、人目につかないように塀の向う側に放り投げたのである。

この行為の象徴性はきわめて高い。『失われしもの』の読者で、アランが聖職の道に進むことになった経緯を知っている者にとっては、村人たちの噂は必ずしも事実無根のこととは思えないだろう。アランにとっても、姉の帰還の意味するものは、単に聖職者としての評判を傷つけられるといった外面的なレヴェルのものではない。モーリアックは「とても高貴で清らかな運命の源には、あるどうしようもない事態や、片寄り、奇形、傷といったものまであるかもしれない」と述べている¹⁷⁾。破滅につながるかもしれない「傷」こそが聖性の源となりうるのなら、アランにとって姉トータの存在はその「傷」である。彼女の帰還は、それを回復不能なほど広げるかもしれない誘惑であった。ガブリエルの行為は、破滅の方向へと傾く恐れのある絶望感からアランを救ったのである。

ガブリエルはなぜ、面識のないアランを告白の相手に選んだのだろうか。それはアランの中に「傷」があることを見抜いたからではないのか。告白の冒頭にその鍵はある。「あなたの中で守られてきたものはまた脅かされたこともある、そう感じるのです」(215) とガブリエルは記している。小説家としてのモーリアックは、二人の主人公の共通点を明瞭に説明することよりも、読者に少しずつ発見させていくことを好んだが、プレイヤー版小説・戯曲全集に収録されているヴァリエントは曖昧な表現に説明を与えてくれる。

(...) なぜならば、あなたは深淵から救い出された、あの無垢なる者の一人に違いないからです。つまり、聖性と罪との間で選択の余地がなかった者たちの一人であると言いたいのですが... (1039)

もちろんガブリエルがアランの過去を知っていたということではない。共に深淵の縁にいたが、一人は「選択の余地なく」——つまり自ら選択したように見えるが、実は運命によって——聖性へと向かい、他方は宙づりになっている、そしてその深淵を越えて感応しあっている、そのような二人の人物を作家は設定したのである。こうしてみると、改めてあのツゲと月桂樹の枝葉の場面の重要性が浮かび上がってくる。枝葉がきれいに切り払われた司祭館の敷居の踏

み段は、月光に照らされ「むき出しに見えていた」。その段の中央は多くの人の足に踏まれて「窪んでいる」。

摩滅した古い石段。にもかかわらず、この夜の月光の元で、人の顔より表情豊かに、それらは無言の生命で脈打っていた。そして、汚れた手でこの石段をあらわにした男は、突然そこからある名状しがたい眼差しを受け取った (250)。

ここもまたヴァリエーションによると、「多くの罪によって汚れた手」の男がむき出しになった石の踏み段から受け取ったものは、何か分らない「火の矢」となっている (1057)。燃える炭を通してモーセに語りかけた神のエピソード (『出エジプト記』3章) から分かるように火は神のしるしである。また、預言者イザヤは、召命の日に熾天使に押しつけられた炭火によって、その唇の咎を取り除いてもらった (『イザヤ書』6章)。火はこのように罪の清めのしるしでもある。したがって、この場面においてアランのいる司祭館へのステップ (踏み段) を踏んだガブリエルは、その回心へのステップを一步確実に踏んでいたことになる。

一方、この司祭館敷居の踏み段というトボスの重要性は、『黒い天使たち』という小説の構造からも確認できる。この知られざる善行の後、小説の第3章で、地元の人々からは「城」と呼ばれている屋敷、アンドレスやマチルド、20歳も年上のその夫サンフォリアン・デバたちの住む屋敷にガブリエルは「入城」する。以後、ガブリエルの犯す最後の犯罪、殺人が語られる場面以外は、ほとんどすべての筋立てがこの「城」の中で展開するような印象を読者は受ける。古い館は多くの部屋と薄暗い廊下とで入り組み、嵐の度ごとに停電してしまう (236)。このような閉鎖空間の中心に位置しているのが、常に薬剤の匂いが充満している病弱なデバの部屋である。この、まるで迷路のような空間で、アンドレスの相続した土地の売買をめぐる、ガブリエルとデバが対立し、まわりの者を巻き込みながら話は展開していく。外では多くの場合、雨が降りしきり、時に屋敷は洪水の中を漂うノアの箱船の様相さえ帯びることになる。

世界は水浸しだった。あるいは何週間もの間、屋敷と庭園はこの雨に閉じ込められ、他の人間から切り離されるかもしれない。彼らは全員、この箱 (arche) の中で、この船 (nef) の中で暮らすことになるだろう (294)。

この息詰まる閉鎖空間はまさしく迷宮であり、なるほど、『黒い天使たち』は探偵推理小説に似ているという批評が出るのも無理はない。財産をめぐる欲望が渦巻き、アンドレスをめぐる愛憎劇が繰り広げられるこの迷宮から逃れて、ガブリエルは二度、あの司祭館敷居の踏み段に戻ることになる。一度は殺人を犯した後、疲れ切った心と体で、もう一度は新聞の記事から事件の捜査が進んでいることを知り怯える屋敷の住人たちから、半ば逃れるように、半ば追われるように、罪人の足は無意識のうちに司祭館へと向かっている。

この永遠に降り続けるかのような雨がなかったら、彼は路上で真横に臥したことだろう。司祭館が見えた。ああ、思い切ってあの扉をノックできれば！ 彼は水浸しの敷居の上に着くまり、おずおずと両手でそこを撫でた。誰かの顔であるかのように触れ、指の下にその皺を感じた（322）。

男は震えながら踏み段の上に座った。その皺はすでに両手にはお馴染みのものである。少し落ち窪んだ頬を愛撫するかのように、彼はその皺に触ってみた（352-353）。

小説の骨格を成しているのは、この「悪徳渦巻く迷宮から司祭館敷居の踏み段へ」という動きである。リオジャ到着時に「踏み段」と最初に接触した際も、ガブリエルは彼を恐喝している昔の情婦——この女を彼は殺すことになる——のいるバリという巨大な迷宮から逃れてきたのであった。司祭館はガブリエルを救うことになるアランのいる場所で、その「敷居」はアランが体現するものへの入口を表していることは容易に見て取れる。では、なぜその敷居の「踏み段」が特権的なトポスになっているのだろうか。「踏み段」に関する三つのシーンから浮かび上がってくるのは、それが一つの見事に構築された比喩になっているということである。ガブリエルが枝葉をはらって、あらわにした踏み段は、人の足に踏まれて「窪んで」いた。「表情豊かな」その「顔」に重ね合わされるのは、あの十字架に架けられた男の顔である。男の身体は「むきだし」になって、その胸と腹は「窪み」、肋骨は浮き出ている。殺人犯が撫でていたのは、その男——月光の降りそそぐ石段より彼に名状しがたい眼差しを送っていた男——の窪んだ頬と苦悶に歪んだ皺なのである。

さて、敢えて非論理的な言い回しを許してもらえらば、三度目に司祭館敷居の踏み段に戻るのはガブリエルではなく、息子のアンドレスである。小説の末尾において、以前は「その精神が決して留まることのない一連の観念を表していたにすぎない」（303）聖職者であるアランとともに、彼は石段の上に立っている。司法の手を逃れ、神父のもとで安らかに死んでいこうとしている父の看病をした帰りである。この場所の象徴性を考えると、アランの神秘的力によって、やはりこの若者も父のバトンを受けて神父との霊的交流を始めるのではないか、そのような予感とともに黒い天使たちの物語は終わっている。

月明かりのもと、皺の一つ一つが見える擦り減った踏み段の上で、彼らは向かい合って立っていた。するとその時、ただ目配せをして手を握っただけで、どれほど愛しあっているのか二人は気づいたのである（367）。

註

モーリアックの著作は主に次のガリマール社、プレイヤード版を参照した。

Œuvres romanesques et théâtrales complètes, édition établie par Jacques Petit, 4 vol., 1978-1985

Œuvres autobiographiques, édition établie par François Durand, 1990

以下それぞれ OR., OA. と略記する。

- 1) *Le Romancier et ses personnages*, OR. II, p. 848.
- 2) *Ce qui était perdu*, OR. II, p. 376.
- 3) 『マタイによる福音書』9章, 『マルコによる福音書』5章, 『ルカによる福音書』8章
- 4) 『ダニエル書』8-9章
- 5) 『黒い天使たち』本文, 及びヴァリエーションからの引用に続く数字は, 以下すべて上記プレイヤード版 OR. III のページ数に対応する。
- 6) J.E. Flower, *Les Anges noirs de François Mauriac*, Minard, 1969, pp. 39, 54 (note 24).
- 7) *Souvenirs retrouvés*, Fayard INA, 1981, p. 285.
- 8) 『パンセ』ブランシュヴィック版断章 416 番
- 9) *Souvenirs retrouvés*, p. 287.
- 10) 序文は OR. II に収録 (pp. 883-885)。
- 11) Flower, *op. cit.* の冒頭にアルランからの引用が挙げられている。
- 12) *Souvenirs retrouvés*, p. 283.
- 13) *La Chair et le sang*, OR. I, pp. 240-241.
- 14) *Le nœud de vipères*, OR. II, pp. 447-448, 525.
- 15) *Ce que je crois*, OA., p. 608.
- 16) *Le nœud de vipères*, OR. II, p. 499.
- 17) *Souvenirs retrouvés*, p. 278.

(本学講師)